

上海・南京・大連・旅順フィールドワークに参加して 飛田雄一

8月13日から21日の9日間、神戸・南京をむすぶ会訪中団に参加した。今回は、上海・南京・大連・旅順を訪ねた。南京では、南京大虐殺の現場や南京神社跡などを訪ねたが、ここでは朝鮮関係のことを報告したいと思う。



上海では、魯迅公園をたずねた。1932年4月29日に尹奉吉がこの公園(旧虹口公園)で天長節の式典時に爆弾を投げつけたのである。これにより上海派遣軍司令官の白川義則、上海日本居留民団長の河瑞貞次らが即死し、重光葵公使、第3艦隊司令官の野村吉三郎ほか数名が重症を負った。

以前「(重光公使に?)不幸にして当たらず」という新聞記事がでて問題になったということを知ったことがある。その記事のことを確かめようと思ったが未確認である。どなたかご存知の方がおられたら教えていただきたい。

記念碑の近くに朝鮮風の梅亭がありそこが尹奉吉記念館となっている。閉館時間になっていたが無理をいって開けていただいた。中では朝鮮族の女性が丁寧に説明をしてくれた。



尹奉吉記念館のある梅亭

尹奉吉は、忠清南道礼山で生まれた独立運動家で、中国に渡ったのち金九の韓人愛国団に入って独立運動を展開したのである。金沢で処刑され陸軍墓地の通路部分に暗葬され戦後に正式に埋葬されたことでも知られる。



記念館内の展示

今回のフィールドワークの目的は南京大虐殺と旅順虐殺だった。旅順虐殺については、加藤周一氏が1988年8月23日付本紙夕刊の「夕陽妄語」欄「『南京』さかのぼって『旅順』」で触れている。戦闘が終了したのちにも、旅順と南京で民間人に対する虐

殺が行われたが、加藤氏は、この二つの事件は、海外でよく知られた事件だが、日本政府が日本人に知らせようとせず、責任の所在を明らかにしようとしなかったことが共通していると述べ、旅順虐殺が南京大虐殺につながったとしている。また神戸時代のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も「神戸クロニクル」1894年12月7日付)紙上で「日本軍の行為はなんの言い訳も受け入れられないであろう。(中略)婦人、子供や非戦闘員に対する不必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである」と批判している。



萬忠墓

その犠牲者の「萬忠墓」が旅順にある。敷地内にはよく整備された記念館もある。ちなみに日清戦争の中国での名称は「甲午戦争」のようだ。



安重根

もう一カ所、旅順で訪問したかったのが安重根が処刑された旅順監獄である。正式名は「旅順日俄監獄旧史址陳列館」である。「俄」はロシア

が作った監獄を日本が日露戦争ののちに増改築して作りあげたものである。萬忠墓とともに外国人に公開されていない施設で当初見学できないとの通知を受けたが交渉のすえ行くことが出来るようになった。安重根のために特別に準備されていた部屋も、また朝鮮独立宣言を書きここで病死した申

采浩が入れられていた部屋も見学した。図録『難以忘却の一頁 - 旅順日俄監獄・上集』および日本語の解説もある『血・魂』および、20分程度の映像が収録されたCD-ROMを買い求めてきた。



特に処刑場ではショックを受けた。ソウルの西大門刑務所にもある形式だが、ロープが3本も吊り下げられているのである。また、

処刑後、死体が硬直するまでに木の丸い棺桶に折り曲げていれ埋葬したのである。その棺桶が一部記念館内に移され展示されていた。その棺桶も最後の時期には木材が不足して底の抜けたものを作り死体を固めるだけに使用して溝を掘って埋めたのである。



旅順監獄



監獄内の安重根の部屋

神戸・南京をむすぶ会の訪中団は今年で7回目。SARS事件で中止した昨年を除いて1997年から毎年夏に行っている。日本の侵略の現場を訪ねる旅は、気が重くなることも多いが毎年新しい発見のある旅である。来年も南京ともう一カ所を訪ねることになっている。